

唐澤 誠個展

和のスピーカと空間の融合性

●唐澤 誠個展

会場／ソミド（ソニービル／東京・銀座）

会期／1991年12月3日～6日

企画・デザイン・制作／唐澤誠建築音響設計事務所

撮影／鈴木教雄

①手前の円柱と球形のスピーカは、それぞれφ150×H1830およびφ400。円柱はアクリル下地に加賀友禅貼り、FL内蔵。球はFRP下地に加賀友禅貼り、こちらは脱着可能。奥の円柱形スピーカは、それぞれφ300×H920、φ150×H1830で、アクリルに和紙貼り、FL内蔵。最奥の円形スピーカはφ1000で同じ仕上げ。円柱はいずれも天井に向けて音が出る（寸法の単位はミリ。以下同じ）

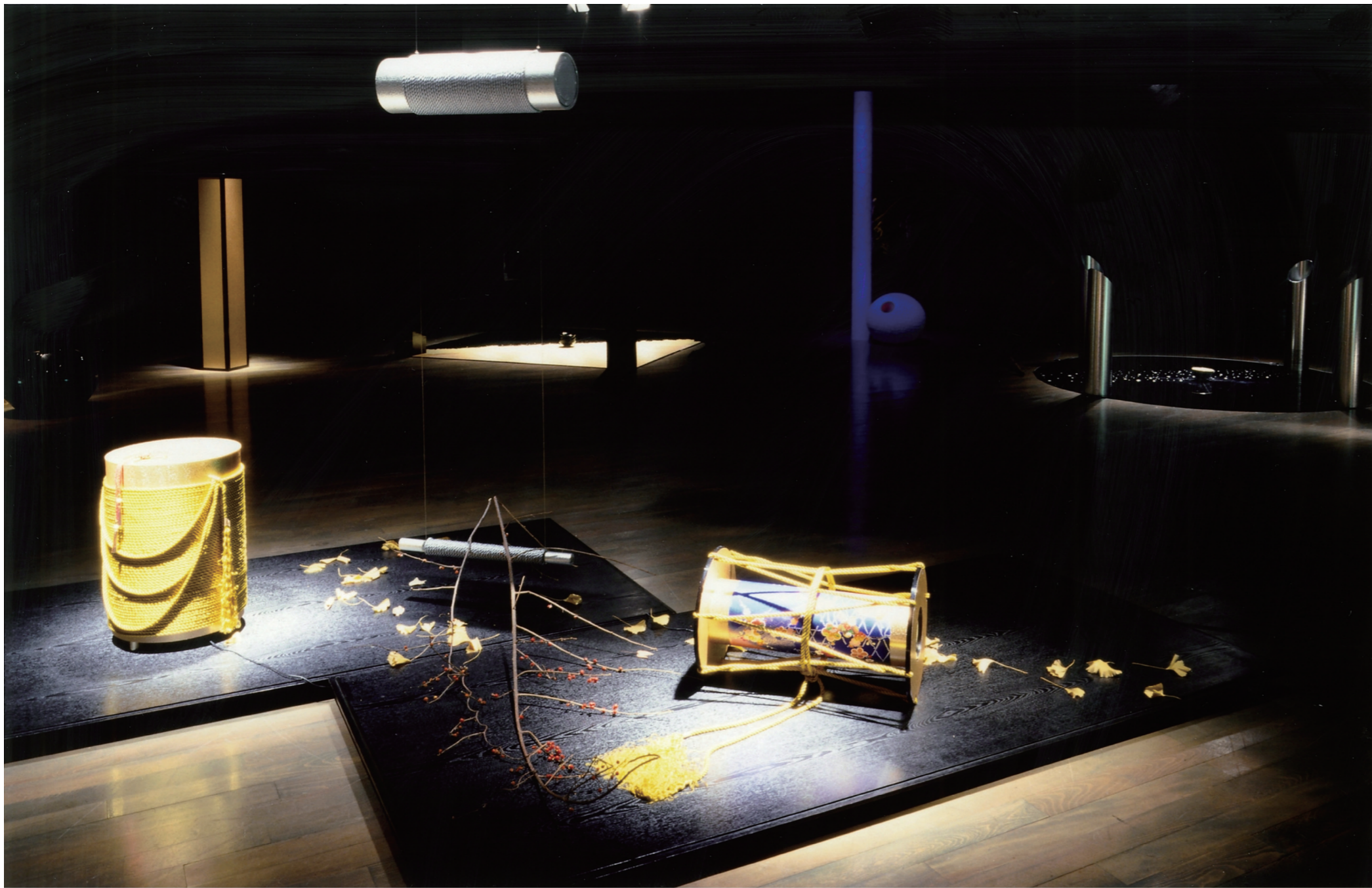


①



②茶室をイメージしたスピーカユニット。音楽を聴く時の身が引きしめる精神性を表現。座部分は一辺が1830で、黒い部分がアクリル板、金の部分がビニルシート貼り。周囲の4本の黒い四角柱がスピーカで、やはり上に向かって音が出る。80×80×H750、アクリル板（黒）

②



③

飲食店、物販店にかかわらず、大半の店舗では空間演出の一助としてBGMを流している。しかし、音の発生源であるスピーカはというと、既製品そのままが、天井付近のどこかに設置されているという例が圧倒的に多い。つまり、店のデザインにかかわらず、スピーカはどこでも同じ色と形のもの設置されているわけである。

建築音響設計家の唐澤誠さんは、そんな現状に学生時代、すなわち20数年前から矛盾を感じていたという。その想いは、この1～2年特に強くなり、今回の個展へとつながった。

この個展に出品されたスピーカは、唐澤さん自身がデザインし、自ら制作したもの。いずれも“和”がテーマとなっている。「デ

ザイン手法にはいろいろありますが、大きく分けると和と洋に分かれると思います。しかし、和にこだわったのは、和の持つ精神性をもう一度見直してみようということからです。つまり、洋のように音楽を肉体的に聴くのではなく、精神的に聴いてみたいということが一つ。そして、スピーカは外国から入ってきたものですが、もっと日本独自の文化を込めたものに引き寄せられないかという、二つの狙いがあったんです」と、そのコンセプトを説明する。

「今回の個展は準備期間が4カ月しかなく、やりたかったことの半分もできなかった」（唐澤氏）ものの、「ある一つの提案はできたと思う」という。事実、見学に訪れた一般客はもちろん、メーカーからも問い合わせ

せが相次いだ。ユーザーやメーカーに与えた刺激は決して小さくはない。この個展の余韻が残っているうちに、第二弾、第三弾も打ちたいという。次回はスピーカ単体ではなく、空間演出も含めた個展をやりたいと、意欲満々の唐澤さんだ。

なお、今回制作したスピーカの一部については特許を申請中である。「ロイヤリティが欲しくて申請したのではなく、誰かがこれを真似して、この提案が変な方向へ行ってしまうようにするため」という。

いずれにせよ、これが一つの契機となって、機能性のみが追求されてきたスピーカに視覚的な付加価値がプラスされていくことを期待したい。〈編集部〉



④

③鼓（つづみ・右）と太鼓。鼓は左右から、太鼓は上から音が出る。中央の吊りスピーカは左右から音が出る。鼓がφ300×470、太鼓がφ300×480、いずれもアクリル下地に加賀友禅貼りおよび組みヒモ巻き付け、一部ビニルシート貼り

④円錐形スピーカ。頂部がバンチングメタルで、そこから音が出る。φ300×H1450、スチール下地焼き付け塗装

⑤手前の球形スピーカはφ400、FRP下地スエード調塗装。円錐形スピーカはφ300×H1450、スチール下地スエード調焼き付け塗装。テーブル上のスピーカは200×200×H350、アクリル下地スエード調ビニルシート貼り



⑤